「文明」No.21, 2016　29-39

南フランス，ヴァール県南西部の 4 つのロマネスク聖堂について
──ラ・セルからシ＝フールまで──

中川久嗣*1，安達未菜*2

（*1 東海大学文学部ヨーロッパ文明学科教授，*2 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期）

〔研究ノート〕

Les 4 Églises Romanes au sud-ouest du département du Var:
La Celle, Ollioules et Six-Fours-les-Plages

Hisashi Nakagawa*1 and Mina Adachi*2

*1 Professor, Department of European Civilization, School of Letters, Tokai University.
*2 Course of Civilization Studies, Graduate School of Letters, Tokai University.

Nous faisons quelques analyses sur les églises et les prieurés à l'époque pré-romane et romane qui se trouvent au sud-ouest du département du Var, surtout aux communes de La Celle, Ollioules et Six-Fours-les-Plages. Ces edifices ont été construis du Xe siècle jusqu'auXIIIe siècle. Sur chacune de ces églises, nous analysons son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures et ses decorations, etc.

Accepted, Jan. 6, 2017

1. はじめに─歴史的背景

南フランスのヴァール県（Département du Var）は，プロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地域圏（通称《PACA》）の中にあって，ブッシュ＝デュ＝ローヌ県とアルプ＝マリティム県にはさまれ，その地域圏の最南部に位置する人口約 500 万の中規模県である．歴史的には長い間いわゆる「プロヴァンス」州を構成してきたが，行政単位のヴァール県としてあらためて設置されたのはフランス革命の後の 1790 年のことである．西はおおよそサント＝ボーム山塊（Massif de la Sainte-Baume）を境としてブッシュ＝デュ＝ローヌ県と接し，東はカンヌ─グラース─サン＝トーバンを結ぶ線をおおよその境として，1860 年にそれまでのニース伯領と合わせて新たに設置されたアルプ＝マリティム県と接する．現在ヴァール川が流れるのはこのアルプ＝マリティム県である．

現在のヴァール県に相当する地域は，古代ローマ時代には，属州ガリア・ナルボネンシスの中核都市であるアルルやアクアエ・セクスティアエ（現在のエクス・アン・プロヴァンス）の東に隣接する地域として，イタリアとプロヴァンス，そしてさらに西の属州アキタニアやイベリア半島との間の交通を結ぶ役割を果たしていた．西ローマ帝国の滅亡後，混乱のうちに東ゴートや西ゴートといったゲルマン諸国の支配が次々とおよび，その後フランク王国の統治下に入る．しかしシャルルマーニュの死後に繰り広げられる王国の分割劇（ヴェルダン条約やメルセン条約など）の進行とともに，プロヴァンスは中フランク王国を上位において構成するブルグント王国の一員となる．ブルグント王は形式的にはプロヴァンスの上級支配者として君臨し続けるが，実質的な支配権は歴代のプロヴァンス伯（あるいはアルル伯）が行使した．10 世紀初めにもとはカロリング家に連なる貴族であるボゾン家のルイ 3 世（盲目王・西ローマ皇帝）が低ブルグント王国を治め，その従兄弟であるウーゴ（ユーグ）がプロヴァンス公として低ブルグントの首都をヴィエンヌからアルルに移した（アルル王国）．ウーゴはその後，イタリア王の地位と引き替えに高ブルグント王ルドルフ 2 世にアルル王国の王位を譲り，このルドルフの系統が 1032 年までプロヴァンスを含むブルグント王の地位を引き継いでゆく．ただし，この場合も，上級封主権とは別に，いわば現場であるプロヴァンスでは，ウーゴから続くボゾン家の系統が，10 世紀から 11 世紀初めにかけてプロヴァンス伯として実効支配を続けた．この時代の封建的支配関係は複雑で，一定地域を単独の伯が支配するのではなく，相続によって分割された複数の伯（共同伯）が並立し続ける状

本研究ノートは，『文明』投稿規定に基づき，レフェリーの査読を受けたものである．原稿受理日：2017 年 1 月 6 日

態が続いたのであった[1].

およそ 9 世紀から 10 世紀にかけての南フランスは，地中海地域の覇権を握っていたイスラム勢力による侵略の波に洗われたことでも知られる．この侵略は，最初は 8 世紀頃から始まるのであるが，彼らはフランス中・北部への進出が 732 年に有名なトゥール・ポワティエの戦いによって挫折した後も，9 世紀になって，サン＝トロペ東方の山中のフラクシネートゥム（Fraxinetum）に拠点を築き，そこから周辺地域への略奪行為を恒常的に続けた[2]．973 年，その前年にクリュニー修道院長がフラクシネートゥムに拠点を置くイスラム勢力に襲撃されるという事件が起き，それをきっかけとしてアルル伯兼プロヴァンス伯であったボゾン 2 世の息子ギヨーム 1 世（解放者，Guillaume Ier de Provence, le Libérateur）が，兄のルボー1 世（同じくプロヴァンス伯を名乗っていた）や周辺諸侯と協力して南フランスからイスラム勢力を一掃することに成功した[3]．その後，このギヨーム 1 世系の家系とルボー1 世系の家系が 10 世紀から 11 世紀にかけて，伯としてプロヴァンスを共同統治し，11 世紀半ばから 12 世紀にかけて，前者はカタルーニャのバルセロナ伯家と，また後者はトゥールーズ伯家と婚姻関係を結ぶことによって，プロヴァンスはバルセロナ伯（後のアラゴン王家）とトゥールーズ伯による分割（あるいは競合）統治の時代を迎えることとなる．この両伯家は，1125 年に協定を結び，トゥールーズ伯はデュランス川の北を，バルセロナ伯はデュランス川の南を支配領域とすることで合意することとなった．バルセロナ伯（アラゴン王）の家系は，その後ジェヴォーダン伯領やフォルカルキエ伯領をも支配地域に収めるが，13 世紀になるとシチリア王・ナポリ王を兼ねていたシャルル・ダンジュー（聖王ルイすなわちフランス国王ルイ 9 世の弟）との婚姻関係から，プロヴァンスはアンジュー家の支配下に入ることとなる．アラゴン王は，ルイ 9 世との間で 1258 年に締結したコルベイユ条約により，ピレネー以北における権益をすべて放棄している．

この間の経緯を，キリスト教会の側から追ってみると，後のヴァール県に相当する地域は，古代末期からはおおよそアルル司教の管轄下に置かれていた．しかしこの地域のキリスト教化は着実に進行し，オランジュ，アプト，ヴェゾン，そしてニカエア（ニース）といった諸都市がキリスト教共同体の核として成長していた．カンヌ沖のレラン諸島にあるサン＝トノラ修道院（Monastère de l'île Saint-Honorat）は 5 世紀初頭に創設されたが，ヨーロッパ各地にその名声が広まると同時に各地から巡礼たちもやってきた．また同じ 5 世紀初めには，ジャン・カシアン（聖カシアヌス）によって，マルセイユのサン＝ヴィクトール修道院（Abbaye Saint-Victor）が創設されている．この 2 つの修道院は，中世期を通じて南フランス全体に分院を数多く作るのみならず，幾人もの司教を輩出し，その宗教的・精神的な影響は，南フランスは言うまでもなく，北フランスにも遠く及び，その名声もまことに計り知れないものがあった．14 世紀の教皇ウルバヌス 5 世は，後者サン＝ヴィクトール修道院の出身である[4]．

それ以外でおおよそ今日のヴァール県から東に至る地域における注目すべきキリスト教の拠点としては，リエ（またはリエズ，Riez），トゥーロン（Toulon），そしてフレジュス（Fréjus）などが挙げられるであろう．とりわけリエとフレジュスには，5 世紀の洗礼堂の遺構が残っている．

ところで，Victor Lassalle はかつて，中世プロヴァンスのロマネスク聖堂建築に対する古代ローマ建築の影響を論じた論文の中で，ニーム，オランジュ，ディー，リエ，そしてマルセイユといった都市に囲まれたエリアを設定し，そのエリアがプロヴァンス・ロマネスク建築固有の領域と一致するとした．彼は，そのエリアの外側には古代建築におけるいわば一種の「no man's land monumental」が拡がっているとし，ヴァール県やアルプ・マリティーム県にある考古学的グループはそうしたプロヴァンスの古代―中世相関領域から除外できるものと見なした[5]．

本稿で取り扱うヴァール県南西部すなわち，ブリニョル周辺から，モール山塊（Massif des Maures）西側の平野を南下し，地中海側のイエール＝トゥーロン周辺に至る帯状の地域は，Lassalle の設定する「プロヴァンス・ロマネスク建築固有の領域」の，まさしく東側外縁部に相当する．そこは一部（Six-Fours）を除き，彼の言うところの古代の「no man's land monumental」でもある．こうした古代―中世の建築的中核地帯の外側にありながらも，ヴァール県南西部のロマネスク聖堂は，どのような歴史的変遷をたどり，そしていかなる特徴を持つものなのであろうか．ラ・セルからシ・フールにかけての地域にある聖堂について，それぞれ現地調査（2016 年 3 月に実施）を踏まえた考察を交えながら見てゆきたい．

2. ラ・セルのラ・ガイヨール礼拝堂（Chapelle de la Gayolle, La Celle）

ブリニョル（Brignoles）から県道 D405 と D5 でラ・セルを経由して西へ約 8 キロである．カラミ川やエスカレル川といった小川の支流のほとりの，ブドウ畑が広がる平地のただ中にあるのだが，聖堂へのアクセスはきわめて分かりにくい．林に囲まれた同名のドメーヌ（Domaine La Gayolle）の敷地の中にあり，敷地の西側からそのドメーヌの裏手（北側）に回ると，まるでドメーヌの建物に隠れるようにして建っている（ただし私有地の中なので，訪問には所有者の許可が必要である）．

この場所には，古代には墓地と霊廟があったが，5 世紀末～ 6 世紀頃に，初期キリスト教時代の方形の平面プランを持つ小聖堂が建てられた．現在の聖堂は，さらに後の 10 世紀～11 世紀頃のもので，その古い小聖堂から 10 メートルほど東へ移動したところに建設された．したがって現在の聖堂の西ファサードのポルタイユ（扉口）は，古代の寺院の東端部分に位置することになる．史料での初出は 1019 年で，1030 年からはマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院に属した[6]．聖堂は小規模である．その壁面は不規則な形の石が荒く積まれていて，東を向いた半円形後陣の南北に方形の袖廊がつく．南側の袖廊は，外から見ると長い建物のように見えるが，それは袖廊（側室）に後代の建物が延長されているためで，もともとの袖廊部は北側と同じく小さくて短いものである．後陣・袖廊ともに非常に小さな開口部が 1 つずつ開くのみである．鐘楼はない．

聖堂内部への入口（ポルタイユ）は，身廊の西壁に開いている．中に入ると，あたかも洞窟のような印象を受ける．壁面は上塗りされているが，ところどころが剥落している．また部分的に赤い色で塗られており，時代の古さを感じさせる．身廊は短く，入口から後陣の東端までの全長は 10 メートルに満たない．天井は身廊の幅に比べて高く，半円筒形のトンネル・ヴォールトである．身廊の壁には，南北で大きさが異なるけれども，半円形の壁付きアーチが埋め込まれている．そのアーチはそれぞれ，北側では冠板の乗る壁付き円柱が，また南側では壁付きのピラストル（かなり傷んでいる）が受ける．身廊の南北には幅が狭く高さも低いトランセプト（袖廊）がつき，その地面にはそれぞれ石棺が残されている．

注目すべきは，その交差部の 4 つの面のアーチを支える（あるいは，はめ込まれた）背の高い円柱および背の低い角柱の柱頭彫刻や冠板である．北東角のものは方形の冠板のみであるが，それ以外のものとしては，線刻風のアカンサス彫刻（南東角），ダイヤ柄装飾のついた大きな冠板の下にゼンマイ風に下から上に「V」字形に広がって左右で渦巻きとなる植物文様（北西角），同じモチーフの文様に大きなアカンサスの葉脈文様が付け加わったもの（南西角）などである．また南東角の背の高い円柱に接する内陣側の壁には，二重円を持つ車輪（あるいは「かざぐるま」）が彫刻された石がはめ込まれている．こうした彫刻は，そのモチーフがプレ・ロマネスク期にさかのぼる古さを感じさせるものであって，おそらくはこの聖堂の建てられる前の 6 世紀頃の古い小聖堂のものが再利用されたのであろう．この最後に挙げた二重円の車輪などは，時代は異なるものの，ローヌ下流にあるクリュアス（Cruas）のサント＝マリー大修道院付属教会の地下クリプトにある「回転する渦巻きの輪」（11～12 世紀）と似ており，そこには世界を動かす時の流れ，あるいは自然や人間をめぐる原初的な生の力などを感じ取ることができよう[7]．

ところで，ラ・ガイヨール礼拝堂の名を一躍世に知らしめたのは，この聖堂の後陣部の発掘（16 世紀）によって発見された初期キリスト教時代の石棺によってであった．発掘では 2 つの石棺が見つかったが，そのうちの 1 つ（エノディウスの石棺）は，天文学者でもあったペーレスク（Peiresc, 1580–1637）が買い取り，エクス・アン・プロヴァンスの自邸に置いた．しかし 1787 年にその邸宅が取り壊された際に失われてしまった[8]．もう 1 つの「シャグリアの石棺」（sarcophage de Syagria）の方は，幸運にも現在はブリニョルの郷土博物館で見ることができる．この石棺は，およそ 3 世紀頃のものとされ，古代末期のガリアにおいて今日まで伝わる最古の石棺のひとつとも言われる[9]．シャグリアは，6 世紀のこの地の有力者の女性で，おじ（あるいは父親）であるエノディウスと自分自身の死後の埋葬ために，3 世紀あるいは 4 世紀に作られた石棺を遠方（イタリアあるいはギリシア）から運ばせた．エノディウスは古代末期である 5 世紀のガリアの高官であったが，その地位を棄ててこの地に隠棲し，祈りの生活に入ったと言われる[10]．エノディウスが葬られた石棺は失われたが（ペーレスクのデッサンだけは残っている），「シャグリアの石棺」の方は，今も述べたようにブリニョルの博物館にある．その前面

の彫刻には，釣りをする人やオラント（祈る人）とともに，「善き羊飼い」（le Bon Pasteur）が現れており，3 世紀の初期キリスト教時代のものと考えられる[11]．しかし向かって左端に太陽神（アポロンか？）を思わせる人物の上半身も彫られており，この石棺彫刻には異教的要素も認められる．

ラ・ガイヨール礼拝堂からは，これらの石棺の他にも，19 世紀の後陣部の発掘によって，高さ約 1.2 メートルの六面体モノリスが見つかっている．初期キリスト教時代の祭壇墓石（autel-cippe paléochrétien）で，その表面には，上部に東方からの影響を感じさせる優雅なフェニックス，その下には頭部が扁平アーチとなった枠組みの中に，ギリシア語の「カイ」と「ロー」を組み合わせてキリストを表すいわゆる「クリスム」の浅浮き彫りが施されている．「カイ」の上部の腕の先端には「アルファ」と「オメガ」が吊り下げられている．墓碑のようにも見えるこの祭壇石は，5 世紀あるいは 6 世紀のものとされ，現在はやはりブリニョルの博物館にある[12]．

ラ・セルのラ・ガイヨール礼拝堂は，古代から続くその歴史的経過の長さ，プレ・ロマネスク的要素を維持する聖堂建築，そこで見つかった初期キリスト教時代の数々の遺物など，プロヴァンスの中核地帯の外側（あるいは周縁部）にあって，地味で小さいながらもさまざまな点において貴重な価値を持つ聖堂である．われわれは，ともするとプロヴァンスの著名な聖堂建築のみに目を向けがちであるが，このような隠れた聖堂建築の存在を忘れてはならないのである．

3. ラ・セル修道院（Abbaye de la Celle）

ブリニョルの南西およそ 2 キロ，ラ・セルの小さなコミューンの中心にある．11 世紀初め（1011 年）にマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院がここに土地およびそこに建つサント＝ペルペテュ教会（Église Sainte-Perpétue）の寄進を受け，修道士を送り込んだ．彼らは古代ローマ時代のヴィラの跡に修道院を建設した．その修道院付属サント＝マリー教会（Église Sainte-Marie）は 1056 年に献堂されている．ベネディクト派のこの修道院は，11 世紀終わりには，壁で囲まれた広大な敷地の中に，男子修道院のみならず，女子修道院をも備えるようになり，前者はサント＝ペルペテュ教会（現在はない）を，後者はサント＝マリー教会（現在は教区教会）を使用したと言われる．この女子修道院は，12 世紀以降は多くの有力者から土地や財産の寄進を受けたのみならず，南フランスの有力貴族の子女などを集めたことでも名声を博するようになった．13 世紀には例えば，1225 年に，フォルカルキエ伯ギヨーム 4 世の娘で，プロヴァンス伯レーモン・ベランジェ 4 世の母であるガルサンド・ドゥ・サブラン（Garsende de Sabran）がこの修道院の修道女となっている（彼女は 1242 年にここで死んでいる）．その時代，ラ・セルには 100 名以上の修道女がいたと言われる[13]．14 世紀になると，サン＝ヴィクトール修道院やル・トロネ修道院としばしば対立するようになった．1538 年には，国王フランソワ 1 世がこの女子修道院に立ち寄り，彼を迎えた修道女たちの優雅さに感心している[14]．17 世紀に入ると，この修道院の改革を望んだマザラン枢機卿の命により，女子修道院はエクス・アン・プロヴァンスに移され（1660 年），ラ・セル修道院自体も結局は閉鎖されてしまった．フランス革命後は国有財産として売却に付され，その後は納屋や倉庫に転用されるなどして急速に荒廃が進んだ．その後は何人かの個人所有をへてヴァール県が所有するところとなり，1990 年から修復作業が続けられ今日に至っている[15]．

図 1　Chapelle de la Gayolle

現在のラ・セル修道院の建物は，11 世紀の古い修道院を 12 世紀後半から 13 世紀にかけて建て直し，拡張したものである．ちょうど同じ時期に，ここから約 35 キロ北東にあるシトー派のル・トロネ修道院が建設されており，この有名なシトー派修道院建築の影響が大きいとされる[16]．実際にクロワトル（回廊）の様子や付属聖堂の内部などはル・トロネのものとよく似ている．

修道院中央を占める大きなクロワトルは，一辺およそ 14 メートルの四角い庭を取り囲むが，その形は正確には正方形

ではなく，南のギャルリー（歩廊）が他よりも少し長くなった台形状である．それは西のギャルリーが 6 世紀まで存続していた古代のヴィラの建物の壁（土台）に沿って建てられているためである．各ギャルリーには半円筒形トンネル・ヴォールトが架かり，一定間隔でコーニスの上から横断アーチがヴォールトに向けて立ち上がる．その横断アーチは，例えば東のギャルリーでは縦が 30 センチと比較的小さなキュ・ドゥ・ランプ（cul-de-lampe）が受けるのだが，北のギャルリー（ここが最もよく修復整備されている）においては，横断アーチを受けるのはサント＝マリー教会側の壁では縦が 80 センチ程度の方形のキュ・ドゥ・ランプで，中庭側にあっては，コーニスをそのまま冠板としてその下に柱頭彫刻の施された壁付き円柱がキュ・ドゥ・ランプとなっている．その円柱は縦が約 1 メートル程度のもので，キュ・ドゥ・ランプ状のものなので，したがってその円柱は地面までは降りていない．またさらにそのキュ・ドゥ・ランプはそれぞれが中庭に向けて開口された 2 つのアーチにはさまれる形で，アーチの間のエコワンソン（スパンドレル）につけられている．それらのアーチは半円形で，円筒形のモールディング（大玉縁）によって内側が縁取られている．冠板および柱頭彫刻のついた円柱が，左右でそのアーチを受ける．中庭に向けて開かれたこの開口部の基部は地面からおよそ 1 メートルである．

この大きなアーチは，それぞれがその内側に小さなアーチ（やはり内側が円筒形モールディングとなっている）を 2 つずつ含み，その 2 つの小アーチは冠板と柱頭彫刻を持つ 3 本の小円柱が支える．さらにその 2 つの小円柱の上（タンパン部分）には小さな丸窓（丸孔）が開いている．こうしたアーチの仕様は，ル・トロネ修道院のクロワトルに見られるシトー派の意匠とよく似ている．ただし，ル・トロネのそれがほとんど無装飾でシンプルな造形であるのに対して，ラ・セルの北のギャルリーではアーチの下を支える円柱の柱頭に，横断アーチを受けるキュ・ドゥ・ランプ状の円柱の柱頭も含めて，さまざまな彫刻が施されている．基本的にはアカンサスなどの植物文様であるが，柱頭の各角に渦巻きを持つ極めてシンプルな線刻状の装飾もある．またうねる波や幾何学的な図形様のものも見られる．こうした彫刻類の存在は，もちろんこの修道院がベネディクト派のものであったこともあるが，さらにはここに女子修道院があったということも大きいのかも知れない（ただし付属聖堂には装飾は見られない）．またこの北のギャルリーの柱頭彫刻については，ゴシックへの萌芽が見られるとも言われ，あるいはマノスクのノートル＝ダム・ドゥ・ロミジェ教会（Église Notre-Dame de Romigier, Manosque）の後陣に並ぶ柱の柱頭彫刻と比較されうるとする研究もある[17]．

参事会室または集会室（Salle Capitulaire）には，東のギャルリーから入る．中央に 2 本の太い柱が立ち，その柱頭部からあたかも生い茂る樹木の枝のように，それぞれ 8 本の太いリブがヴォールトへ向けて広がる．それらは合計で 6 つあるベイのそれぞれにおいて交差リブを構成する．部屋の 4 面の壁に降りてきたリブは，その壁の中ほどの高さにつけられたキュ・ドゥ・ランプが受け止める．東のギャルリー側の壁には，入口の左右に，中に 2 本の柱と 3 つの小アーチを収めた大きなアーチの開口部（アーケード）が 2 カ所開いている．反対側の外壁の側は，内部に向けて大きく隅切りされた窓が 3 つ開いている．部屋の中央にある 2 本の柱の柱頭彫刻は，非情に簡素化されたアカンサスの葉で，線刻状の渦巻き，星柄のような花弁文様なども見られる．この参事会室の全体的な意匠も，ル・トロネのそれと非常に似たものとなっている．

ラ・セル修道院の付属サント＝マリー教会（Église Sainte-Marie）は，クロワトルの北のギャルリーのさらに北に隣接して建っている．聖堂の外側，特に北側の壁は，石積み（上部と下部で石の大きさが異なる）だけが目に入る厳めしくて味気のない外観を呈しているが，内部に入るとそこは非常に端正で美しい空間が整えられており，典型的な 12 世紀～13 世紀のロマネスク建築である．3 ベイからなる単身廊形式で，半円筒形トンネル・ヴォールトが載る．そのヴォールトは高さもあって，全体的にゆったりとした広さを感じさせる．身廊の南北の壁には半円形の壁付きアーチが並び，南側ではその中にそれぞれ半円頭部で内部に向けて隅切りされた開口部がつき，採光の役割を果たしている．それらの壁付きアーチの間にはピラストルが立ち，その上にコーニスを起点として横断アーチがヴォールトについている．凱旋アーチから東の後陣は，半円形の平面プランで，その上に半ドームが載る．そのドームの頭頂部は身廊よりも低い．その段差の部分，すなわち凱旋アーチの上部の三日月状のスペースには丸窓が開いている．後陣部を含めて，この聖堂内部には装飾の類いが一切ない．まるでシトー派の聖堂を見ているかのようなシンプルさであるが，身廊から後陣にかけての仕様は，例

えばヴァール県北部にあるアンピュのノートル＝ダム＝ドゥ＝スペリュク教会（Notre-Dame-de-Spéluque, Ampus）などともよく似ていると言える（ただしアンピュの場合には内陣北側に側室が付け加えられている）．ラ・セルでは聖堂への入口は，聖堂の西壁に現在つけられているものではなく，身廊の南側の壁，すなわちクロワトルの北のギャルリーとの間に 2 つ開いていた．このサント＝マリー教会はラ・セルの修道女のみが使用していたものであり，聖堂西側にはもとは男性修道士のためのサント＝ペルペテュ教会が建っていた（現在は失われている）[18]．聖堂の西壁の上には方形の質素な鐘楼が立っている．

ラ・セル修道院は，1886 年に歴史的建造物（Monument Historique）に指定されたが，1990 年にヴァール県がここを所有して以来，修復・再建工事が進められてきた．それまでは，クロワトルの南側，すなわち食堂や厨房などはヴォールトと壁が完全に崩落してなくなっていた．また北のギャルリーなども，中庭に面する側のアーケードの開口部はすべて埋められて倉庫として使用されていたが，今日ではロマネスク時代のオリジナルの姿を復活させつつある．2015 年の冬にも大規模な修復作業が行われ，2016 年春からは再び一般公開されるに至っている．

4. オリウールのサン＝ローラン教会（Église Saint-Laurent, Ollioules）

オリウールは，トゥーロンからエヴノス方面へ向けて国道 N8 を東へ約 7 キロ，レップ川（La Reppe）西岸沿いの小丘陵地に広がるコミューンである．丘の頂には中世期の城塞があり，その南側のゆるやかな斜面に，かつては都市周壁に囲まれていた旧市街が広がる．旧市街の東半分（quartier bourgeois）は幾何学的な都市プランによって家々が並んでいる．一方，西半分（quartier canonial）はサン＝ローラン教会の北西にあって，ゴシック様式のアーケード付き住宅や，トンネルのように住居の下をくぐる街路など，15 世紀以来の古い街並みを保っている．

オリウールの街は，この地方に豊かに見られるオリーヴにちなんで，中世にはオリオーリ（Oliolis）と呼ばれていた[19]．この街の名前が史料に出てくるのは 1031 年のことである[20]．その頃からマルセイユ副伯（vicomte de Marseille）がオリウール領主としてこの街を支配した．マルセイユ副伯による城塞の建設は 11 世紀頃とされ，城塞の名が史料に出てくるのは 1044 年である[21]．これはプロヴァンス伯ギヨーム 1 世（Guillaume Ier de Provence）が，973 年（または 974 年）にフラクシネートゥムのアラブ人の要塞を攻略した後のことであった．当初は街全体を囲む周壁はなく，この城塞の防壁しかなかった[22]．その内側にはドンジョン，城主や騎士たちの館，櫓，礼拝堂などが含まれていた．同じ 11 世紀には，マルセイユのサン＝ヴィクトール修道院の影響力の増大が見られる．13 世紀には，聖王ルイ（国王ルイ 9 世）が，十字軍に向かう途中この街に滞在した[23]．14 世紀になると，プロヴァンス女伯でナポリ女王のジャンヌ 1 世（ジョアンナ 1 世）の死後，同伯位をめぐってシャルル・ドゥ・デュラ（カルロ 3 世）とアンジュー伯・ナポリ王ルイ 1 世の争いが起こり，前者を支持するエクス同盟（Union d'Aix）が 1382 年に結成されるが，その際オリウールはアンジュー家を支持するに至っている[24]．その争いは結局，アンジュー側の勝利に終わり，プロヴァンス伯位はアンジュー家が継承してゆくが，それも 1480 年にルネ・ダンジュー（聖王ルネ）が亡くなると，ほどなくしてプロヴァンスはフランス王国に併合されることとなった．15 世紀以降は，オリウールはオリーブや柑橘類の栽培などによって繁栄した．その後フランス革命期には若きナポレオン・ボナパルトがこの街に滞在している．

サン＝ローラン教会は，オリウールの旧市街の南端，現在のジャン・ジョレス広場に後陣と鐘楼を向ける形で建っている．西ファサードはヴィクトール・クレマン広場に面している．この場所はもともと古代ローマ時代の聖域であったが，住民が城塞の礼拝堂以外にも新たに教区教会を持つことを望んで建設された．その建設年代については正確には分かっていないが，1096 年にトゥーロン司教（Jacques de Palma）が，司教座聖堂参事会を創設するに際して，オリウールのこの聖堂を参事会の管轄のもとに置いているので，その年にはすでに建設されていた模様である[25]．最初は東側に後陣のつく単身廊形式のものであった．後陣の南東部には墓地があった．1372 年から 1375 年にかけて，オリウールの旧市街を取り囲む周壁が建設され，この聖堂の鐘楼がその一部に取り込まれた．15 世紀に入ると，先に触れたように，オリウールの街の繁栄とともに住民の数も増加したため，教区教会の大きさを広げる必要が生じ，1475 年にトゥーロン司教（Jean Huet）の命により拡張工事が行われることとなった．工事は 1517 年ま

で続けられ，それによってこれまでの身廊の南北両側に側廊が増築された[26]．1652 年には，側廊のさらに外側に，南北 3 室ずつ並ぶ礼拝室がつけ加えられた．この時の工事の資金を拠出したのはオリウールの裕福なブルジョアジーの家々であったという[27]．その後は大きな増築や改築は行われずに今日に至っている．

西ファサードは，ヴィクトール・クレマン広場いっぱいに延びる横幅を持っている．まだ身廊が 1 つだけであった時代の中央のファサードから左右に増築されていった様子が，その石積みの違いからよく分かる．三角形の切妻部分にも後の時代に上部のラインを整えるために少しかさ上げされたことが見て取れる．ポルタイユは 3 つあって，中央のものが最も大きい．それは 2 段組みの尖頭形アーキヴォルト（ゴシック様式）からなり，その外側のアーチを形作るクラヴォーは大きくて美しい．その左側と右側に開かれた 2 つのポルタイユは，中央のものより少し小さく，半円形アーチが載る．それら 3 つのポルタイユの上にはそれぞれ半円頭部で外側に隅切りされた細長い窓が開いている．西ファサードの最も北（向かって左）の増築部分には小さな丸窓がつけられている．聖堂の南北それぞれの外壁は，17 世紀に側廊のさらに外側に付け加えられた礼拝室の壁であり，北側では方形の建物と三角屋根になった建物が並んで外側に張り出しているが，南側では身廊部より背の高い方形の建物が 1 つ付くだけである（その建物の内部の 1 階部分に礼拝室が 3 つ並ぶ）．後陣は半円形平面プランのものが 3 つ並ぶが，最も大きな中央の後陣は，高さのある方形の鐘楼がその後陣の東側に直接建てられているので見ることができない（鐘楼の北面に曲面の一部分だけ見ることができる）．鐘楼上部には，4 面すべてに半円頭部の開口部が開き，その中に鐘が吊されている．この鐘楼は 17 世紀のものであるが，19 世紀になって最上部にさらに小鐘楼が載せられた（大時計と鉄製の欄干がつく）．鐘楼下部には東面の向かってやや右寄りに縦長の四角い窓が開いている．鐘楼の左右に並ぶ小後陣は高さがわずかに異なり，北側（向かって右側）のものが少しだけ背が高い．2 つの小後陣とも，きっちりとした石積みで，東端に半円頭部で外側に向けて隅切りされた細長い窓が開いている．

聖堂の中には，西ファサードの中央のポルタイユ，あるいは南側のポルタイユ（最も東の礼拝室に比較的新しく開けられたもの）から入る．西ファサードから入った場合は，5 段の石段を降りて身廊の床面に至る．内部は，非常にシンプルであると同時に重厚感のあるもので，その厳粛な様子はロマネスク期の雰囲気を今によく伝えるものとなっている．3 つの身廊が並ぶ 3 廊式で，トランセプトはない．中央の身廊は 3 ベイからなり（各ベイの大きさは微妙に異なる），それぞれのベイはアーケード，すなわち 4 重になった半円形の大きなアーチ（それらのアーチは量塊感のあるピアとなって床まで降りる）の連なりを介して側廊（16 世紀）に通じる．天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトで，各ベイの間に 2 重に重ねられた横断アーチが架かる（それはほんのわずかに尖頭形か）．南北の側廊は同じく 3 ベイからなるが，主身廊よりも幅が狭い．天井は同じように半円筒形のトンネル・ヴォールトであるが，横断アーチを受けるのは，コーニスに付けられたシンプルなキュ・ドゥ・ランプ（cul-de-lampe）である．側廊の外側に 17 世紀になってさらに増築された南北それぞれ 3 つずつの礼拝室は，側廊に対して直角方向に半円筒形に穿たれた，まるで小洞窟のような印象を与える空間である．実際，今日では電気の照明で堂内を明るくしているが，それでも開口部が少ないために薄暗く，ロウソクを点火しただけの電気のない時代には，これらの礼拝室は本当に洞窟の穴蔵の中にいるような錯覚に陥ったのではないかと思ってしまう．3 つの後陣はみな半円形プランで，コーニスの上に半ドーム（cul-de-four）が載る．大きさは主後陣が最も大きい（半径約 3 メートル）．3 つとも半ドームの最上部は身廊のヴォールトより低く，その段差を構成する三日月状の凱旋アーチ（勝利アーチ）には，主後陣では小さな丸窓，両側の小後陣ではギリシア十字の開口部が開けられている．これら 3 つの後陣には，それぞれ内部に向けて隅切りされた半円頭部の細長い開口部がつけられているが，彫刻装飾の類いは見られない．あたかもシトー派の聖堂建築を見ているかのようである．主後陣には，3 トンもの大きな石の祭壇が置かれている[28]．かくしてオリウールのサン＝ローラン教会は，まことにプロヴァンス・ロマネスクの美しさを今に伝える見事な例の 1 つであると言えよう．後の時代の増築が加えられているにもかかわらず，そのシンプルさと厳粛性が今に至るまでよく保たれている聖堂なのである．

5. シ＝フール＝レ＝プラージュのノートル＝ダム・ドゥ・ラ・ペピオル礼拝堂（Chapelle Notre-Dame de la Pépiole, Six-Fours-les-Plages）

トゥーロンから西へおよそ7キロ，バンドール（Bandol）からは東へおよそ5キロに位置する．高速道路A50の出口No.13で降り，西へ向かい，工場・倉庫地区を抜けてペピオル通り（chemin de Pépiole）をおよそ2キロほど進むと，そうした近代的な喧噪とはうって変わって，オリーブや糸杉に囲まれた静かで落ち着いた敷地の中にノートル＝ダム・ドゥ・ラ・ペピオル礼拝堂が建っている．ここはシ＝フールのコミューンの北の端にあたる．シ＝フール自体は，もとはマッサリア（マルセイユ）を建設したギリシア系フォカイア人が，内陸部に住むケルト形リグリア人などの襲撃に備えて紀元前6世紀頃にこの地域（ル・ブリュスクとその周辺）に造った6つの要塞拠点に由来する．古代ギリシア・ローマ時代を通じて，シシエ半島の西側にシタデル（La Citadelle）と呼ばれる城塞と港があった[29]．中世になると，マルセイユからこのあたりの土地や集落などの所有・支配をめぐって，マルセイユ副伯やプロヴァンス伯と，マルセイユのサン・ヴィクトール修道院が競合関係にあった．14世紀には，プロヴァンス女伯でナポリ女王ジャンヌ1世（ジョアンナ1世）の死後，その後継者をめぐって争いが起こり，シ＝フールは当初はシャルル・ドゥ・デュラ（カルロ3世）を支持するエクス同盟側に加わるが，後にアンジュー伯・ナポリ王ルイ1世の側についている．

考古学的発掘調査によれば，ノートル＝ダム・ドゥ・ラ・ペピオル礼拝堂のあるこの場所には，5世紀にまでさかのぼることのできる初期キリスト教時代の修道院があったらしい（Sancta Maria de Sextixfurnis）．同じ頃，聖カシアヌスが東方よりマルセイユにやって来てサン・ヴィクトール修道院を創設しているが，ラ・ペピオル礼拝堂の建築にも，やはりシリアや小アジア，あるいはキプロスなど東方の影響が見られるという[30]．現在残る礼拝堂の建物は，10世紀あるいは11世紀初め頃に建てられたものであると考えられている．本稿の最初に取り上げたラ・セルのラ・ガイヨール礼拝堂と同じく，プロヴァンスの初期ロマネスク期に属するものである[31]．

ラ・ペピオルの名前が最初に史料に見い出せるのは，11世紀のサン・ヴィクトール修道院文書の中においてである[32]．実際，12世紀中頃にはサン・ヴィクトール修道院がマルセイユからトゥーロンに至る海岸地域の土地を確保し，シ＝フールもその中に含まれた．しかし13世紀には，このサン・ヴィクトール修道院の凋落が始まり，それに伴ってラ・ペピオルはトゥーロンの司教座聖堂参事会の管轄下に入ったようである[33]．

ノートル＝ダム・ドゥ・ラ・ペピオル礼拝堂は，フランス革命以降は国家によって売却された後は打ち捨てられすっかり荒廃してしまっていたが，1956年にベルギーのベネディクト会マレス修道院（またはマレッツ修道院，Abbaye de Maredsous, Belgique）からここにやって来たセレスタン・シャルリエ神父（le père Célestin Charlier, 1911–1976）が修復・整備作業を進めた．現在に至るまであたかも庭園のようにきれいに整えられた参道を進むと，その奥にこのうえなく美しくそして同時に非常に古い歴史を持つ小聖堂が建っている．11世紀から12世紀にかけて改築と拡張工事が行われたにもかかわらず，この聖堂は今日に至るまで，ヨーロッパの中でも最も古い姿をとどめるプレ・ロマネスクの聖堂の1つである．

そうした印象を，訪れる者にとりわけ強く与えるのが，東から見た横に3つ並ぶ後陣の姿であろう．ほぼ一直線にきれいに並ぶそれら半円形プランの後陣は，大きさも高さもおおよそ同じである．わずかに土台部分が北から南へと傾斜している．中央の後陣（主身廊に接続）には半円形頭部の小さな開口部がつく．その両側の後陣には四角くて小さな開口部が，向かって右側（北側）ではほぼ中央に，向かって左側（南側）では不規則な位置に開けられ，また丸い小さな開口部も見られる．東側から見ると，両側の後陣の壁は垂直に建つが，中央の後陣の壁はわずかに末広がりの台形である（真横から見ると北側の後陣も前方に向けてやはり末広がりとなっている）．これら後陣外壁の石積みは，中小の石が荒積みされており，その素朴な光景が，なおさらこの聖堂の歴史の古さを感じさせるものとなっている．後陣側からは，中央の身廊の奥に立ち上がる大きめの鐘楼と，その手前（身廊と後陣の間）に立つ小鐘楼が，前後に並んで見える．

南壁には，内側が半円形アーチの円筒形となったポーチがついており，聖堂内部にはその中に開いたポルタイユから入る．内部には，まるで石の洞窟のような原初的かつ神聖な空間が広がっている．建築構造としては，主身廊の両側（南北）に側廊がついた3廊式で，それぞれの身廊部は1ベイである．しかし中央の主身廊のみ，背の低いセグメンタルアー

図 2　Chapelle Notre-Dame de la Pépiole（外観）

図 3　Chapelle Notre-Dame de la Pépiole（内部）

チを介してさらに西側に建物（l'avant-nef）が延長されている．Marthe Ponsot によれば，最初に主身廊が 10 世紀あるいは 11 世紀初め頃に建てられ，続く 12 世紀にその両側に壁で隔てられる形で 2 つの側廊が増築され，さらに 13 世紀になって，主身廊と側廊の間が大アーチによって開かれたのだという[34]．中央の身廊は，この聖堂の最も古い時代にあった小さな聖所（長さ 6.8 メートル，幅 2.5 メートル）に対応する[35]．主身廊と両側の側廊は，青みがかった石を組んだ横幅約 70～80 センチという非常に厚みのある大きなアーチ（それは実際にアーチのみで床面に据えられている）によって接続されている．このアーチの力強さが何よりも極めて印象的なのである．しかも主身廊の北側と南側とでは，アーチの大きさ（半径と高さ）が異なる．これは南北（左右）それぞれの側廊の長さ（つまりその大きさ）が異なるためである．主身廊の天井には半円筒形トンネル・ヴォールトが架かる．後陣の起点である「凱旋アーチ」においては，わずかに扁平となったクラヴォーのアーチと半円形ヴォールトの間の狭いズレがあり，小さな切石が横に並べられてそのズレを埋めている．北側の側廊の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトであるが，方形の横断アーチが 2 本架かる．その横断アーチは床から 3 メートルの高さにつけられたコーニスにある素朴な受け石（一種のキュ・ドゥ・ランプ）が受ける．3 つの身廊の中で最も小さい南側の側廊の天井は，主身廊と同様に，横断アーチのない半円筒型トンネル・ヴォールトとなっている．3 つの後陣はどれも半円形平面プランで，中央の主後陣には，真中にロマネスク様式の半円頭部の小さな窓が開く．その両側には 1 つずつニッチがつけられている．3 つの後陣とも石の祭壇が置かれている．北の後陣には 16 世紀の美しい聖母子像が置かれている．また北の側廊の後陣上部にあるペディメント（切妻部分）には，小さな丸窓（oculus）がつけられている．南の側廊の西壁の上部にも同じように小さな丸窓が開くが，これは近年のものである．聖堂のあちこちに開いている窓（開口部）にはめ込まれているステンドグラスは最近のもので，それは黄色や緑色のいろいろな形のビンが横倒しに並べられたものである．聖堂内部から見たその色合いやデザインは非常にシンプルで，この礼拝堂の雰囲気によく調和していると言えよう．

シ＝フールのノートル＝ダム・ドゥ・ラ・ペピオル礼拝堂を貫く素朴かつ静謐な精神は，千年もの時を越えて今なおここを訪れる者の心を打ってやまない．この聖堂は，南フランス・プロヴァンス地方にある幾多の歴史・文化遺産の中でも，最も貴重なもののひとつであると言える．この聖堂の修復に力を注いだシャルリエ神父の質素な墓が，聖堂の建つ庭の一角にひっそりと作られている．彼は聖堂の修復と同時にこの聖堂の保存維持のためのコミュニティーも創設し，そのグループが今日でも建物の管理を行い，一年を通して訪れるものを迎えているのである．

おわりに

本稿ではヴァール県南西部のブリニョルから南へ向けてイエール＝トゥーロンに至る帯状の地域にあるプレ・ロマネスクならびにロマネスク期の中世キリスト教聖堂のいくつかについて，現地調査の結果を踏まえてそれらの歴史的背景や建築的な特徴などについて述べてきた．この地域は，Victor Lassalle の設定する古代―中世の建築的連続性の濃厚な「プ

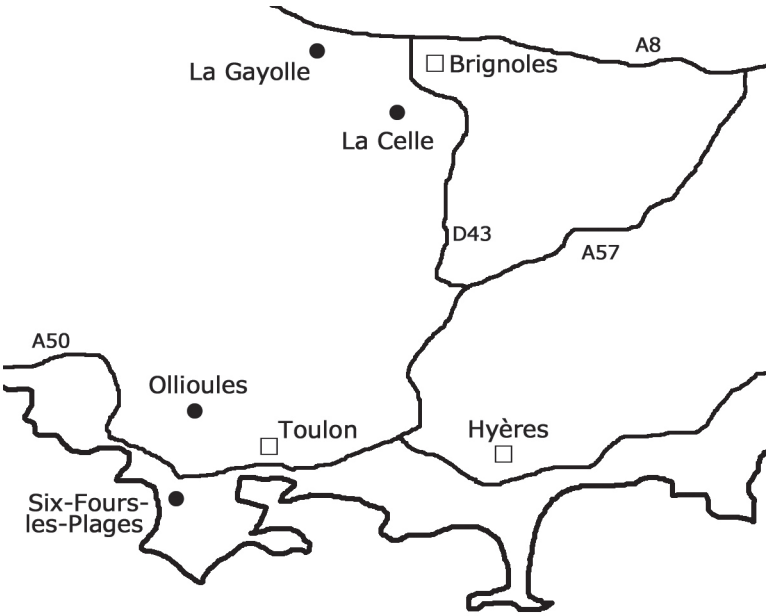

図 4　ヴァール県南西部地図

ロヴァンス・ロマネスク建築固有の領域」の外側にあたるが，しかしこれまで見てきたように，そこには非常に古い歴史的起源を持ち，南仏ロマネスク様式の特徴を豊かに備えた聖堂建築が存在するのである．今回は取り上げる余裕がなかったが，ここで扱った聖堂以外にも，ヴァール県南西部のこの地域には，北から南へとブリニョル（Brignoles），ベス＝シュル＝イソール（Besse-sur-Issole），ピュジェ＝ヴィル（Puget-Ville），キュエール（Cuers），イエール（Hyères），ラ・ガルド（La Garde），ル・カストレ（Le Castellet）など，注目に値するプロヴァンス・ロマネスクの聖堂を数多く見いだすことができる．大規模でモニュメンタルな建築だけではなく，周縁部に点在するこうした中小の聖堂群を広く含めて，南仏プロヴァンスのロマネスク文化が形作られていることを，われわれは忘れてはならないであろう．

注

1　Maurice Aghulon et Noël Coule, *Histoire de la Provence*, 2007, Paris, Presses Universitaires de France, pp.23-27.
2　柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編『世界歴史大系・フランス史 1』，山川出版社，1995 年，172-174 頁.
3　Maurice Aghulon et Noël Coule, op.cit., pp.26-27.
4　*Ibid*., pp.19-22.
5　Victor Lassalle, *L'influence antique dans l'art roman provençal, Revue archéologique de Narbonnaise*, Supplément 2. Paris, Éditions E. de Boccard, 1983, pp.8-10.
6　Yann Codou, *Les Églises médiévales du Var,* Forcalquier, Les Alpes de Lumière, 2009, p.112.
7　中川久嗣「南仏アルデッシュ県ローヌ川西岸流域の中世ロマネスク聖堂について―シャンパーニュ・シュル・ローヌからヴィヌザックまで」『文明』第 18 号，東海大学文明研究所，2013 年，49 頁.
8　Robert Bailly, *Chapelles de Provence*, Le Coteau, Éditions HORVATH, 1988, pp.98-99.
9　Édouard Baratier, dir., *Histoire de Provence*, Toulouse, Édouard Privat, 1969, p.71.
10　Jean-Pierre Brun, *Carte Archéologique de la Gaule, 83-1, Le Var*, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Paris, 1999, p.336.
11　*Ibid*., p.337.
12　Fernand Benoit,"Autel-Cippe de Brignol", dans *Provence historique*, tome 4, Marseille, Fédération Historique de Provence, 1954, pp.131-132.
13　Frederique Barbut, *La route des abbayesen Provence*, Rennes, Éditions Ouest-France, 2012, pp.128-129.; *Dictionnaire des Églises de France*, *II-D*, *Cévennes-Languedoc Roussillon*, Paris, Robert Laffont, 1966, p.58.
14　Raoul Berenguier, *Églises et abbayes du Var*, Paris, Nouvelles Éditions Latines, sans date, p.10.
15　*RIP*.
16　Yann Codou, op.cit., p.105.
17　Yann Codou et Francesco Flavigny, "L'Abbaye de La Celle", dans *Congrès Archéologique de France, Monuments du Var*, Société des Monuments Français, Paris, 2005, p.185.
18　*Ibid*., p.179.
19　*GV*.
20　*RIP*.
21　*RIP*.
22　Gaston Beltrame, *Chroniques et histoire d'Ollioules*, Ollioules, E. Durbec Editeur, 1976, p.38.
23　Patrick Verlinden, *La Provence Chrétienne*, Marseille, Éditions les 7 Collines, 2005, p.228.
24　Gaston Beltrame, op. cit., p.52.

25 *RIP*.
26 Marthe Ponsot, “L’église Saint-Laurent d’Ollioules” dans Marthe Ponsot et Henri Guérin, *La Pepiole, Six-Fours, Ollioules*, Saint-Léger-Vauban, Zodiaque, sans date, p.34.; Gaston Beltrame, op.cit., pp.38–39.; *RIP*.
27 *GV*.
28 Marthe Ponsot,op.cit., p.36.
29 Jean-Pierre Brun, *Carte Archéologique de la Gaule, 83–2*, *Le Var*, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Paris, 1999, pp.726–738.
30 *RIP*.
31 Marthe Ponsot, “La chapelle Notre-Dame de la Pépiole, Six-Fours-les-Plages”, dans *Travaux de l’Institut d’Histoire de l’Art de Lyon*, Cahier No.15, Lyon, Université Lumière Lyon 2, 1992, p.13.
32 Robert Bailly, op.cit., p.107.
33 Marthe Ponsot, op.cit., pp.9–10.
34 *Ibid*., p.13.
35 Yann Codou, op.cit., p.185.

略記号

GV: Guides de Visite.
RIP: Renseignements ou Informations sur Place.

掲載した写真はすべて筆者撮影．図 1 は 2016 年 3 月 8 日，図 2 と 3 は 2016 年 3 月 9 日．
誌面の都合により掲載した画像は限られているが，それ以外の写真画像は筆者（中川）開設のウェブページ（http://nn-provence.com）で閲覧可能である．